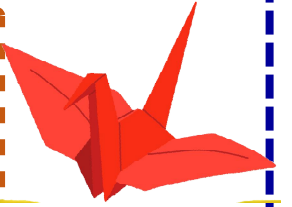




市場文化会館だより



いかがお過ごしですか

『白旗の少女』

今月は、講談社 青い鳥文庫『白旗の少女』(比嘉富子著)をご紹介します。1987(昭和62)年10月に「白旗の少女は私です」と初めて名のり出て、知られるようになりました。以下、小説のあらすじです。

少女は沖縄本島の南部にある「首里」で9人兄弟の五女・末娘として生まれ、平和に暮らしていた。その中で1944(昭和19)年、母が亡くなる。1945(昭和20)年4月1日、沖縄本島中部(首里の北方)にアメリカ軍が艦砲射撃を加え始めた。それから1か月すると、家の周辺にも砲弾がくるようになり、防空壕へ避難することが多くなった。5月10日ころ、父が「何かあったら子供たちで判断して行動するように」と言い残して軍の依頼で食料を探しに家を出た。

それから3日待って、通信隊に父の安否を尋ねると、「それより、早く南へ避難するよう」と言われ、今残っている兄弟姉妹4名(三姉17歳、四姉13歳、四兄9歳、本人6歳)は荷物をまとめて家を出た。昼間はガマ(洞窟)などに身を隠し、夜間に歩いた。まずは父の消息を尋ねながら南へ移動する。そのさなか、一緒にいた兄が流れ弾に当たって死亡、さらに南へ移動するさなか、少女は姉たちとはぐれてしまう。それからは1人で避難することになってしまう。

夜道を逃亡する際、1人になった彼女には頼りになるものは何もない。記憶に残っている肉親の言葉をたよりに戦場をさまよう。1人でガマに入っていこうとしても追い払われてしまう。子供は大きな声を出したりするため、アメリカ兵に狙われてしまうからだ。

彼女は父の言っていたことを思い出しながら行動している。「人間というものは、死ぬ運命にあるときは、どこにいても死ぬものだ。生きるときは、どんな危険にさらされても、生きるものだ」という言葉を思い出すと、砲弾や銃弾を避けるため、必死にガマを探すことをやめて平気で外を歩き回ったりした。ガマからガマへ「ネエネエ」と声をかけて回る。そのため「ヤナ、ウーマク、イナグワラビ(わるくて、きかんぼうの女の子)」という評判が立った。住民の敵はアメリカ軍だけでなく、日本軍も敵と言ってもよい存在であった。

動物に教えられたことも何度かある。蟻が行列を作っている場面に出くわすとその先に何かがあることを感じる。見届けようと先に進むと、日本兵が倒れていて雑のうに蟻が群がっている。そして、その中に金平糖を見つける。また、ウサギを見つけると、親しかった兄の身代わりとして「ニイニイ」と名前を付けてしばらくともに過ごす。そうして彼女は多くの戦死者、自殺する兵隊や集団自決する住民などを目にしながらさまよい歩く。

1人きりでの移動が1か月ほどになったとき、とあるガマに入ったところ、そこには老夫婦がこもっていた。その老人は両手両足がなく、目の不自由な老婆に身の回りの世話をさ

せ、そのガマで暮らしていた。彼らは彼女を優しく受け入れ、彼女はここで初めてその身を休めることができた。外では、戦闘が刻一刻と激しくなっていた。彼女は老夫婦にここで一緒に暮らして、一緒に死にたいと言ったが、それに対して、命の大切さや生き延びることの価値を説かれる。

数日後、ガマの外からアメリカ軍の呼びかけが聞こえた。これから爆弾を投げ込むから、その前に投降することを呼びかけるものだった。老人は老婆へ指示し、自分のふんどしで白旗を作らせ、その旗を彼女に持たせた。そして「世界中の約束だから、これを持っていれば大丈夫だ」と言い聞かせ、自分たちを残して1人で投降するよううながした。

彼女はほかの住民に混じって進んだ。1人の米兵が何かを構え、こっちをねらうようにしているのを見て、カメラのようなが、武器かも知れないと思いながら、かつて父に言われた言葉を思い出し、顔を上げ、笑顔を見せた。彼女はほかの避難者と一緒になり、そこで2人の姉に再会した。1945(昭和20)年6月25日のことだった。



来館された方たちは、いろいろな感想や体験を話されながら見ていました。(7月14日~28日)

